

源氏物語と現世的価値

杉浦 一雄

目次

- 一 はじめに
- 二 漁父の辞
- 三 心の行く方
- 四 聖徳太子
- 五 現世尊重の精神

一 はじめに

これまでに私は、『源氏物語』「絵合」の行事に隠された紫式部の真意を読み解くことによつて、『源氏物語』が、スサノヲノミコトをめぐる神話を源泉とする「異郷をめざす物語」の系譜に列なり、それらを集大成した上で、物語文学の頂点に位置づけられた作品であったことを明らかにしてきた(一)。しかし、『源氏物語』には、その本質においては「異郷をめざす物語」として異郷的価値を志向しながらも、その一方で現世的・世俗的な価値の実現を図るといふ別の側面を見逃

すこともできない。それというのも、『竹取物語』のかぐや姫や『伊勢物語』の在原業平が、宮廷における政治とは無関係に、むしろ現実の政治に背反することによつて異郷的価値を求めたのとは異なつて、光源氏は、「異郷」に価値を置きながらも、現実の政治と密接にかかわり、むしろ積極的に政治に関与していった人物としても描かれているからである。つまり光源氏は、天下の統治を放棄することによつて異郷的価値の実現を図つたスサノヲノミコトとは対照的に、みずからが無上と信ずる異郷的価値の実現を期すために、現実の政界へと身を投じていった人物だつたと言ふことができるのである。

光源氏はもともと、かぐや姫や在原業平、そしてスサノヲノミコトと同様に「異郷をめざす物語」の主人公として描かれながら、何故、それらとは様相を異にした道を歩むことになつたのであろうか。このような光源氏の生き方を、紫式部はいつたい何に基づいて造型したのであろうか。

ここでは、「異郷」に深く心を寄せながらも、俗世に身を置き、現実の政治に果敢に関与していった光源氏の人物像が、何を模範とし、どのように造型されていったかを究明してみたいと思う。

二 漁父の辞

こよなく「異郷」に憧れ、「異郷」に魂を置きながらも、現実の世界に踏み止まり、わが身を捨てて世俗的実践に尽力する人物――。

私は、その源泉の一つに屈原の『楚辞』があつたと考える。屈原の名は、『源氏物語』の中に一度も見えていない。し

かし、人口に膾炙している屈原の悲劇的な生涯が、『源氏物語』の背景にあることはよく知られている事実である。光源氏の須磨流離のモデルとして古来さまざまな人物が指摘されてきているが、その中の一人に、無実の罪で流され、その地で果てた屈原の名が挙げられている。

唐国に名を残しける人よりも行く方しられぬ家居をやせむ

〔須磨〕 一八六—一八七頁(2)

唐の国で後の世に名を残した人にも増して、私はこれから行く方も知れない旅住まいをすることだろうか、というのである。

須磨に到着した光源氏が最初に詠んだ歌である。

この歌で光源氏は「唐国に名を残しける人」を例に挙げて、その人よりもさらに「行く方しられぬ」不安な現在の心境を披瀝している。ここに言う「唐国に名を残しける人」について、『紫明抄』や『河海抄』は屈原のことを指すとみている。

楚屈原をいふ (『紫明抄』 卷第三、三六二頁) (3)

楚之屈原かはなたれたりし事を云歎

〔河海抄』 卷第六、一三九頁) (4)

無論、後の諸注が記すように、流離や配流の対象となった人物は中国でも屈原ひとりに限ったことではなからう(5)。例えば周公旦や白居易などの名を挙げることもできるはずである。しかし紫式部は、名指しこそ避けてはいるものの、

『紫明抄』や『河海抄』が言うように、誰よりもまず屈原のことを想定していたように思われる。

『楚辞』は、その屈原が記したとされる作品を中心に集めたものである。

戦国時代、楚の国の王族の出身であった屈原は、懐王に仕え、王から厚い信任を得ていた。ところが、王から重用されていることを嫉む者があって、王に讒言し、屈原はその讒言によって、辺地へと左遷されてしまった。しかし屈原は、追放の憂き目に遭いながらも、その節を曲げることなく、汨羅に身を投じてみずから命を絶つたのであった。

『楚辞』は、世に容れられぬままみずからの信ずる節義に殉じた屈原の高潔な精神を、哀切極まりなく歌い上げた中国文学の傑作なのである。

その『楚辞』のなかに、「漁父」と題する作品がある。

屈原既に放たれて、江潭に遊び、行く沢畔に吟ず。顔色憔悴し、形容枯槁す。漁父見て之に問ひて曰く、子は三閭大夫に非ずや。何の故に斯に至るや、と。

屈原曰く、世を挙げて皆濁り、我独り清めり。衆人皆酔ひて、我独り醒めたり。是を以て放たる、と。

漁父曰く、聖人は物に凝滞せずして、能く世と推移す。

世人皆濁らば、何ぞ其の泥を漚して其の波を揚げざる。衆人皆酔はば、何ぞ其の糟を舗ひて其の醜を歎らざる。

何の故に深く思ひ高く挙りて、自ら放たれしむるを為すと。

屈原曰く、吾之を聞く、新に沐する者は必ず冠を弾き、新に浴する者は必ず衣を振ふ、と。安くんぞ身の察察を以て、物の汶汶たる者を受けんや。寧ろ湘流に赴きて、

江魚の腹中に葬らるるとも、安くんぞ能く皓皓の白を以てして、世俗の塵埃を蒙らんや、と。

漁父莞爾として笑ひ、柺を鼓して去り、歌つて曰く、

滄浪の水清まば、以て吾が櫻を濯ふ可く、

滄浪の水濁らば、以て吾が足を濯ふ可し、と。

遂に去つて復与に言はず。

(通釈) 屈原はすでに追放されて、湘江の淵のあたりに遊び、沢のほとりを歩きながら辞を口ずさんでいた。顔色は憂苦のために黒ずみやつれて、身体つきや容貌は、瘦せて生気がなく衰えていた。年老いた漁夫が、これを見て問うて言った、「貴下は楚の王室の三閭大夫ではありませんか。何のためにこんなところまで来られたのですか。」と。

屈原はいう、「世間中の人々がみな濁つて汚れているのに、私だけが清んで正しい。衆人が皆酔つて道理がわからないのに、私だけが醒めて道を守っている。こういうわけで私は追放されたのである。」と。

老漁夫はいう、「この上なく聡明で徳高い聖人は、物事に凝りこだわることがなくて、世間と共に推し移ることができる。世の人が皆濁っているのなら、何故自分もその泥を濁してその波を挙げないのか。衆人が皆酔っているのなら、何故自分もその酒糟を食らい、その薄酒をすすらないのか。何故に深く思い憂い、世俗から高く越えて高尚清潔な行ないをして、自分で自分を放逐されるようにするのか。」と。

屈原は曰う、「私はこういうことを聞いている。髪を洗いたての者は、必ず冠の塵を弾いてかぶり、湯浴みを

したばかりの者は、必ず衣の塵を振うものである。これは清潔な者は一層身をけがすまいと思う人情である。どうして潔白な身を以て、よごれた物を受けることができよう。いっそ湘水の流れに身を投げて、江魚の腹に葬られても、どうして真白いわが身をもって、世俗の塵埃をこうむることができようか。」と。

老漁夫はそれを聞いて、にっこりと笑い、櫂の音を高らかに鳴らしながら漕ぎ去り、歌つていう、

滄浪の水が澄んだならば、それで私の冠を洗うことができよう。

滄浪の水が濁ったならば、それで私の足を洗うことができるだろう。

と。そのまま去つて、再び共に物を言わなかつた(6)。

以上が『楚辞』に収められた「漁父」の全文である。

追放の憂き目にあつた屈原が、流離の地で一介の漁師と出会ひ、対話するという場面である。

何故こんなところまで来たのかという漁師の問いに対して、屈原は、世の中の人すべて濁りきり、酔つて、ものの道理がわからなくなっているのに、自分だけが清く澄み、醒めて、道を守っているので追放されたのだ、と答える。これを聞いた漁師は、屈原に向かつて次のように言うのである。そもそもこの上なく聡明で徳の高い聖人というものは、物事にこだわることはないのに、世俗とともによく推移することができないものだ。世の中の人々が皆濁っているなら自分もその泥を濁して波を上げ、世の中の人々が皆酔っているなら自分も酒糟を食らつて薄酒をすすればよいのだ。それなのにあなたは、なぜ世俗から遠く隔たつて高潔な身を保ち、自分で自分を放逐

させるような真似をするのか、と。これに対して屈原は、清潔な者はなお一層身を汚すまいとするものだ。どうして汚れたものを受け入れることができようか。どうして世俗の塵埃を蒙ることができようか、と答えるばかりであった、というのである。

ここで話題とされているのは、聖人の歩むべき理想の道とはどのようなものかということであろう。

あくまでも心の清らかさを守って、高潔な精神が穢れないことを何よりも重んじようとする屈原。それに対して、世の中の人々が濁っているなら自分も濁り、世の中の人々が酔っているなら自分も酔って、常に世の中とともに推移してゆくことの大切さを説こうとする漁師。ここには、屈原と漁師それぞれが信ずる二つのまったく異なった人生態度が示されているのである。

漁師の考えによれば、聖人というものは、みずからの清らかさを守って世俗の塵埃から逃れるのではなく、逆にみずから世俗の直中に身を投じ、世俗のあり方に順応しながら、為すべきことを実践せよ、というのである。一見したところ、屈原の主張が理想主義的であるのに対して、漁師の主張は単なる現実主義、悪く言えば功利主義としか映らないかも知れない。しかし、ここで漁師が語ろうとしているのは、崇高な理想と卑俗な現実との相剋を強靱な精神によつて乗り越えることのできる聖人の偉大さにあるのではなからうか。理想を追い求め、みずからが信ずる高潔な精神に殉ずることは、なるほど清らかで美しい行為には相違なからう。しかし、それよりも、清潔な身を敢えて泥や塵埃のなかに塗れさせ、世俗のあり方に同調しながら、みずからのめざす崇高な理想を俗世という場において実現してゆくというきわめて困難な、茨

の道にこそ、真に徳の高い聖人の歩むべき理想の道がある、と漁師は説くのである。

あくまでも理想を重んじ、穢れた現世を忌避しようとする屈原と、現世的・世俗的な価値を重視し、俗世にあつて理想の実現を図るべきだとする漁師。この二人の主張は、いずれも崇高な理想を前提としながらも、現世の扱いにおいて大きく隔たつていると言えよう。

ここに提示されている相反する二つの人生態度は、私の言う二つの価値観に重ね合わせてみるのできるのではなからうか。屈原の信ずる生き方は、あくまでも崇高な理想に向かつて信念を貫き、そのためには現世そのものを容赦なく放棄してもよいというものである。現世を軽視し、現世を潔く捨て去る点において、異郷に価値を置いた生き方だと言うことができよう。これに対して、漁師の説く生き方は、崇高な理想を抱きながらも、俗世に身を置き、俗世と同調することによつて、現実の世界に異郷的価値を実現しようとする立場であると言うことができるであろう。つまり、現実に拘泥することなくひたすら理想を追い求める屈原の生き方は、スサノヲノミコトやかぐや姫、在原業平などに共通する生き方であるのに対して、理想を抱きながらも、ほかならぬ現世においてその高遠な理想を実現すべきだとする漁師の生き方は、光源氏のそれと軌を一にしていると言ふことができよう。すなわち、光源氏の生き方は、『楚辭』において漁師が説いた聖人の生き方そのものではなからうか。

「漁父」においては、結局のところ、この漁師の発言は、高潔な精神の穢れを何よりも忌み嫌う屈原の耳に届くことはなかつた。このあと屈原はみずからの命を絶つことによつて、その清らかな生涯を全うする。現世を後にして、彼が理想と

する「異郷」へと進んで旅立つて行ったのである。この死によって屈原は、志操を貫き、それに殉じた高潔の士として、後世高く称揚されることになったのである。そのなかにあつて、屈原と真正面から向き合い、屈原の生き方そのものを根本から問い質した、この一介の漁師の発言は、この上なく重いものではなからうか。「遂に去つて復与に言はず」という結びの一句は、屈原と漁師とのあわいに拡がる絶望的な深淵を窺わせて余りあると言つてよからう。

「漁父」という作品は、『楚辞』のなかでもよく知られたものの一つで、司馬遷の『史記』卷八十四「屈原賈誼列伝第二十四」にも引用されている。流浪の身の上にある主人公がその地に住む名もない漁師と会話を交わすという点で特異な作であり、『楚辞』のなかでもとりわけ印象深い場面だと言ふことができるであらう。『史記』を愛読し、漢籍に殊の外造詣の深かつた紫式部は、無論この「漁父」をよく承知していたに相違ない。

三 心の行く方

実は、ほかならぬ『源氏物語』のなかにも一介の漁師が登場し、流浪の身の上となつた光源氏とことばを交わすという、『楚辞』の「漁父」を彷彿とさせる場面が描かれている。

光源氏が住む須磨の家に、宰相の中将（昔の頭中將）がはるばる訪ねて来た時のこと、鄙ふりとはいへ、心尽くしのもてなしをする光源氏の許へ、海産物を携えた土地の漁師たちが現れるのである。

海人ども漁りして、貝つ物持て参れるを召し出でて御覽

ず。浦に年経るさまなど問はせたまふに、さまざま安げなき身の愁へを申す。そこはかとなくさへづるも、心の行く方は同じこと、何かことなるとあはれに見たまふ。御衣どもなどかづけさせたまふを、生けるかひありと思へり。
〔須磨〕 二一四頁

海人が漁をして、貝類を持って参上したのを、源氏の君はお呼び出しになつて御覧になる。海辺で長年暮らしている様子などをお尋ねになると、海人たちは、あれこれと安まる時のない身の上の辛さを申し上げる。よくは判らぬ言葉でとりとめもなく喋っているけれども、「心の向かうところは同じこと。何の違いがあるうか」と、源氏の君はしみじみとした思いで眺めておいでになる。お召物などをお授けになられると、海人たちは生きている甲斐があると有難く思うのだつた、というのである。

一見したところ、「須磨」の巻のなかでも目を引かず、殊更取り上げるべき話でもないのに、何気なく読み飛ばしてしまふような場面である。生き甲斐の「かひ」に「貝」が掛けられ、衣服などを褒美として戴く意の「被く」に貝などを取るために海にもぐる意の「潜く」が掛けられている。ただそれだけの、取るに足りない場面と思われがちであらう。

しかし、ここには漁師が登場し、しかも主人公と言葉を交わしているのである。私は、この事実に着目したいと思ふのだ。

なるほど、ここに登場する漁師は、『楚辞』の「漁父」に描かれた漁師とはまったく様相を異にしていると言わざるを得ない。『楚辞』の漁師が何処か漁師らしからぬ、隠士然とした一角の人物であるのに対して、『源氏物語』の漁師は生

業としての漁に長年勤しんできた、ごく普通の庶民だと言うことができた。またその会話にしても、『楚辞』の漁師が実に見事な弁舌で、理路整然と、聖人の歩むべき道を澁みなく説いているのに対して、『源氏物語』の漁師は訥々としてまとまりがなく、しかも所謂「あまのさへづり」で、訛りが強いために何を言っているのかよくは解らなかつたということになつていて、『楚辞』の場合とは正反対なのである。またさらに、その結末を見ても、『楚辞』の漁師が主人公の考え方と相容れないまま訣別しているのに対して、『源氏物語』の漁師は主人公から褒美を貰い感激して、その明暗は明らかなのである。

このようにことごとくに亘つて、『楚辞』の漁師と『源氏物語』の漁師の描き方には相違があり、対照的ですからあると言つてよいようだ。これを見れば、いづれにも漁師が登場していないながら、両者には何らの共通点もないと言うしかないようである。

それにも拘らず、私にはどうしても『源氏物語』「須磨」の巻に登場する漁師は、『楚辞』に描かれた「漁父」の場面を踏まえているように思われてならないのである。

物語のなかに漁師が登場することはそれほど珍しいことではないかも知れない。しかし、屈原と同じように流浪の身の上となつた光源氏が、その流離の地で漁師と対面し、言葉を交わすという同一の設定が描かれていることは、やはり重視しないではいられない事実ではなからうか。

私が特に注目したいのは、漁師を評して光源氏が何気なく抱いた一つの感慨なのである。

心の行く方は同じこと、何かことなる

光源氏は、みすばらしい漁師たちをわざわざ御前に呼び寄せて、親しく言葉をかけ、ものを尋ねてはその発言に耳を傾ける。その言葉は残念ながらよく解らず、鳥が囀るかのようであつたという。しかし、このとき光源氏は、この漁師たちを指して「心の行く方は同じこと、何かことなる」つまり「心の向かうところは同じだ。何の違いがあるか」としみじみ御覧になつたというのである。光源氏は、このとき何故一介の漁師たちに対して意想外とも思われる、かくも深い共感を寄せたのであろうか。

「心の行く方は同じこと、何かことなる」という評言は、これまで光源氏のどのような感慨として解釈されてきたのであろうか。

そのいくつかを挙げてみよう。

さまざまやすけなき身のうれへを申を聞給て色こそかはれ人間のやすけなき心のゆくゑは源や宰相君などの此海人も同じ事そと観し給心なるへきにや(7)

「世の中はとてもおかくてもおなじ事、宮もわらやもはてしなければ」。蟹の身の愁をきき給ひて、人間のやすからぬ心のゆくへは、源や中将も此海士の身も、おなじ事なる哉と観念し給ふ也(8)。

漁村の生活について質問をすると、彼らは経済的に苦しい世渡りをこぼした。小鳥のように多弁にさえざる話も根本になつてゐることは処世難である。われわれも同じことであると貴公子たちはあわれんでいた(9)。

海辺で暮す年月のことなどをお問ひになりますと、それぞれに苦勞の多い身の辛さを申し上げます。とりとめもなく何を囁るやら分らないような者どもでも、心の苦勞は同じことなのだ、可哀そうにお感じになります(10)。

この海辺に年久しく暮らしている様子などお訊かせになると、あれこれと安まる時のない暮しの辛さなど申し上げます。よくはわからぬ言葉でとりとめもなく囁りつづけるのも、「人間の心の行方は所詮、貴いも賤しいも同じこと、何事の異なるところがあるうぞ」と君はあわれ深く眺めておいでになる(11)。

何が何という目標もなく、漁夫達が、がやがや言うのも、思慮の行く方向(心の在り方)は、同じであるなあ。心配は、身分の上下に関係はないと(12)。

これも人である。この衣、この言葉、この思想にくらべて、威張れる自分ではないのである。よって御衣を賜う。同じ人間である、と思うためである(13)。

心勞は身分の上下に関係なくあるものだ、の意(14)。

身の高下に拘らず、自分の身の上についての考え方のとどのつまりは、誰も同じことで、少しも変りはないのではないか、結局は誰も苦しいというところに落ちつくのだなあ、しみじみした氣持で見えいらっしやる(15)

これらに依れば、「心の行く方」という語は「処世難」「心

の苦勞」「心配」「心勞」などに関するものと解されていることが知られる。また、「同じこと、何かことなる」については、いずれも「身分の上下」に関するものといった認識に立っていることが判る。つまり、海で生活する名もない漁師たちも自分たちと同じ人間だ、心の苦勞に何の違いもない、というのが一般的な理解ということになるのである。そのように見ることは、一応の解釈としては誤りではないであろう。事実光源氏は、漁師たちに向かって暮らし向きなどを尋ね、それに対して漁師たちが生活に追われ氣苦勞の多い身の上であることを述べている。前後の情況から言つて、その解釈を否定することはできない筈である。

しかし私は、ここにはさらに深い作者の意図が込められているように思われてならないのである。そうでなければ、この場面でわざわざ漁師を登場させ、光源氏がしみじみとした感慨に耽る必然性がないのではなからうか。このとき光源氏は、漁師たちを眺めるだけでなく、「心の行く方は同じこと、何かことなる」と、漁師たちと同化してゆく心境にまでなっているのである。もしこのときの光源氏が、通説に言われるように、煩瑣な日常生活がもたらす漁師たちの心の苦勞、心勞に対して共感したとするならば、「心の行く方」という言葉は余りにも重すぎるのではなからうか。

光源氏が言う「心の行く方」とは、心が向かう方向ということであろう。それが「同じ」だということは、光源氏の心とこの漁師たちの心と同じ方向に向いている、ということである。つまり、光源氏の心は、この漁師の心が向かわんとする方向とまったく同じだ、ということになる。

では、「心の行く方」とは何か。

実は、この場面には、「楚辭」のなかの「漁父」が踏まえ

られているのではなからうか。

ここで紫式部が言いたいのは、『楚辞』の「漁父」で示された屈原と漁師の生き方についてなのである。式部は、屈原ではなく、『楚辞』の漁師が示した生き方に共感することを、須磨の漁師にかこつけて披瀝したのではないか。つまり、屈原のように自己の信念を貫いて潔く現世を捨てるといふ方向ではなく、現世においてこそ崇高な理想を実現すべきだといふ漁師の示した生き方に与することを暗に示そうとしたのではなかつたらうか。

かつて須磨に到着した折の心境を、「唐国に名を残しける人よりも行く方しられぬ家居をやせむ」〔須磨〕 一八六一―一八七頁〕と詠んだ光源氏は、その時点で、みずからの進むべき「行く方」を見失い、途方に暮れていたと言ふことができよう。その後の光源氏も、「いづかたの雲路にわれもまよひなむ」〔須磨〕 二〇九頁〕、どちらの道に私は迷つてしまふのであらうか、と詠じているように、いまだ人生の進路を見出だせない不安な心境を吐露していた。しかし、この場面に至つて、光源氏の心はおぼろげながらも、何かを見定めつつあつたように思われる。漁師の登場に対して発せられた「心の行く方は同じこと、何かことなる」といふ力強い一句には、「行く方しられぬ」心境から辛くも脱却し、屈原と訣別したところにみずからの「心の行く方」を見出だそうとする、光源氏のひそやかな確信を見て取れることができるのではなからうか。

ここで紫式部は、流浪の身の上となつた光源氏に漁師への共感を吐露させることによつて、今後の源氏の生き方が、屈原のそれとは袂を分かち、『楚辞』の漁師が指し示した方向に進んでゆくことを明示したと考えられる。

「漂標」以後、帰京を果たした光源氏が、これまでとは打つて変わつて、現実の政治に積極的に関与し、政治的な人間に変貌したと言われるのは、ここにおいて「心の行く方」の転換があつたからではなからうか。高潔な身を敢えて泥や塵埃のなかに塗れさせ、俗世と同調しながらみずからの崇高な理想を俗世のなかに実現してゆく生き方。帰京後の光源氏は、まさに我が身を顧みることなく、俗世のなかに身を投ずるといふ、文字通り「身を尽くし」の生き方を実践していったのであつた。

紫式部は、この場面において、光源氏が屈原のように死を選ばず、『楚辞』の漁師が示した生き方を選択することを、須磨の漁師を登場させることによつて語つた。屈原を暗示した「唐国に名を残しける人」といふ光源氏の和歌はそのための伏線だったのであり、漁師の人物像が大きく相違しているのも、対照的に描こうとする式部の作意だつたと考えられよう。

漁師をしみじみと眺めて抱いた何気ない感慨は、光源氏の進むべき方向をあやまたず指し示していたと言えよう。すなわち、この時の感慨には、光源氏の人生航路を予見的に示した道しるべの役割が与えられていたのである。

このように見てくれば、光源氏が「異郷」における価値を本質としながらも、現世に留まり、現実の政治のなかで崇高な理想を実現するといふ生き方を選んだことの源泉の一つに、『楚辞』の「漁父」といふ作品が踏まえられていたことが理解されてくるのではなからうか。

四 聖徳太子

しかし、光源氏の現世尊重の精神は、ひとり「漁父」の発言にのみ拠つたものではなからう。光源氏の人物造型の源泉には、実はさらに強固な人物が影を落としていると考えられるのである。

「異郷」に深く心を寄せながらも、俗世に身を置き、現実の政治に正面から取り組むというような、『楚辞』のなかで漁師が示した聖人の歩むべき理想の生き方をそのまま体現したかのような尊い人物が、わが国の歴史のなかに実在することを、紫式部はけっして見逃さなかつた。その人物こそ、ほかでもない聖徳太子なのである。

光源氏の生き方は、聖徳太子の生き方に負うところが大きいのではなからうか。

光源氏と聖徳太子との関わりは既に指摘されて久しい。そればかりか、『源氏物語』のなかには、ほかならぬ聖徳太子の名も登場してきている。

「若紫」の巻、北山の僧都の許に身を寄せている少女、若き日の紫の上を見初めた光源氏は、僧都に向かつてその少女を後見したいと唐突に申し入れたが、その要求は容れられなのまま、帰京の日を迎えてしまう。このとき僧都は、心を残しながら去ろうとする光源氏に対して貴重な品々を贈つたが、そのうちの一つに、聖徳太子ゆかりの品があつたのである。

僧都、聖徳太子の百済より得たまへりける金剛子の数珠の玉の装束したる、やがてその国より入れたる箱の唐めいたるを、透きたる袋に入れて、五葉の枝につけて、紺

瑠璃の壺どもに御葉ども入れて、藤桜などにつけて、所につけたる御贈物ども捧げたまつりたまふ。

〔若紫〕 二二二頁

僧都は、聖徳太子が百済から手に入れられた金剛子の数珠に玉の飾りをつけたのを、その国から入れてきた唐風の箱にそのまま納め、さらに透かし織りの袋に入れ、五葉の松の枝につけて、またいくつもの紺瑠璃の壺に、さまざまなお薬を入れ、藤や桜の枝に結びつけて、そのほか土地柄に相應しい数々の贈物もご献上になられた、というのである。

北山を後にしようとする光源氏が僧都から贈られた品が、聖徳太子遺愛の品であつたというのである。僧都は光源氏と親しく語らい、その人となりに深い感銘を覚えたのであろう。その表われの一つがこの品だつたのだ。ここで光源氏が、聖徳太子ゆかりの品を贈られていたということは、光源氏自身が太子の品を持つに相應しい人物であるということを示している。そしてこのことは、とりも直さず、光源氏が聖徳太子その人に擬せられていることを意味している。すなわち、ここでは光源氏が聖徳太子と重ねられ、同一視されていると言つてよからう(16)。

同一視されていると言えば、光源氏の死にも聖徳太子の死を思わせるものがあり、同じように重ね合わされると私は考えている。

聖徳太子の死は『日本書紀』のなかで大変に重く扱われているが、その中に次のような一節がある。

皆曰はく、「日月輝を失ひ、天地既に崩れぬ。今より以後、誰をか恃まむ」といふ。

〔日本書紀〕卷第二十二、推古天皇二十九年二月（17）

太子の死を聞いた誰もが言った、「太陽も月も光を失って、天も地も崩れてしまった。これから先、一体誰を頼りにすればよいのだろうか」と。

人々は、聖徳太子を日月に譬え、死によってその光輝が失ってしまった今、これから先、誰に縋つたらよいのかと嘆いているのである。

この表現は、光源氏の死を思わせる。勿論光源氏の死は『源氏物語』に記されていないが、その死を暗示する「雲隠」という巻名だけの巻の後、光源氏の死を受けた次の一文によって第三部が書き出されている。

光隠れたまひにし後、かの御影にたちつぎたまふべき人、
そこの御末々にありがたかりけり。

〔匂兵部卿〕 一七頁

この世の光であった光源氏がお亡くなりになって後、そのご威光をお継ぎになれるような方は、数多いご子孫のなかにもまたとおいでにならないのであった、というのである。

ここでは、光源氏が日月に譬えられ、その光が失せた今、その跡を継ぐ者は何処にも見当たらないと言っている。聖徳太子の死と比較すると、太子の「日月輝を失ひて」に相当するものが源氏の「光隠れたまひにし」であり、「今より以後、誰をか恃まむ」に抵たるのが「かの御影にたちつぎたまふべき人、そこの御末々にありがたかりけり」なのである。

このように、その死に関しても光源氏は聖徳太子を強く意識した書き方がされているのである。

だが、光源氏と聖徳太子とのかわりには、これに止まるものではない。既に「桐壺」の巻における高麗の相人の予言においては、太子は光源氏の有力なモデルの一人に数え上げられている（18）。

光源氏が八歳の折、右大弁の子のように身をやつして高麗から来朝した人相見に観相してもらったところ、源氏は「国の親となつて天子の位に昇るべき相がありながら、そうなる」と国が乱れ、民が憂えることが起こりそうだ。しかし、だからといって、朝廷の柱石の臣となり国政を補佐するだけで終る器量でもない」と予言された、というのである。この予言をめぐっては、古来さまざまな解釈がなされ、その準拠についても多種多様な説が挙げられ、論じられている。これについては、既に私は、その最も本質的な源泉として『日本書紀』の神話に描かれたスサノヲノミコトに関する予言があることを指摘しておいた（19）。

『源氏物語』の観相と予言は、スサノヲノミコトに関する予言を源泉として、その上にさまざまな準拠が重ねられたものだと思われるが、そのうちの有力な準拠の一人に聖徳太子の名が挙げられているのである。

聖徳太子の最も代表的な伝記として知られる『聖徳太子伝暦』の敏達一二年（五八三）七月の条には次のようにある。

百濟賢者韋北達率日羅。隨我朝召使吉備海部羽島來朝。
此人勇而有計。身有光明。如火焰。（中略）太子
聞日羅有異相者。奏天皇曰。兒望隨使臣等往
難波館。視彼為人。天皇不許。太子密詣皇子。
御之微服。從諸童子入館而見。日羅在床。四望
觀者。指太子曰。那童子也。是神人矣。于時。太子

服^ニ麤布衣^一。垢^レ面帶^レ繩。与^ニ馬飼兒^一。連^レ肩而居。日羅遣^レ人指引。太子驚去。日羅遙拜。脱^レ履而走。諸大夫等大奇。出^レ門而見。即知^ニ太子^一。々々隱坐。易^レ衣而出。日羅迎再拜兩段。大夫亦驚謝罪再拜。修^レ儀而入。太子辭讓直入^ニ日羅之坊^一。日羅跪^レ地而合^レ掌白曰。敬礼救世觀世音大菩薩。伝灯東方粟散王。云云人不^レ得聞。太子修^レ容。折磬而謝。日羅大放^ニ身光^一。如^ニ火熾炎^一。太子眉間放^レ光。如^ニ日暉之枝^一。須臾即止(20)。

百濟の賢者、韋北の達人、日羅を率ゐて、我が朝の召使、吉備海部羽島に随ひて来朝せり。此の人、勇にして計有り。身に光明有りて、火の焰の如し。(中略)太子、日羅は異相有る者なりと聞こしめして、天皇に奏して曰さく、「兎望むらくは使の臣等に随ひて、難波の館に往きて、彼の為人を視む」と。天皇許したまはず。太子密に皇子に諮して、之が微服を御して、諸の童子に従ひて、館に入りて見えたまふに、日羅、床に在りて、四に観る者を望みて、太子を指して曰はく、「那なる童子ぞ。是れ神人なり」と。時に于て太子、粗布の衣を服たまひて、面を垢し繩を帯としたまひて、馬飼の兒と肩を連ねて居りたまへり。日羅、人を遣はして指して引かしむ。太子驚き去りたまひぬ。日羅遙かに拝したてまつるに、履を脱ぎて走る。諸の大夫等大いに奇として、門に出でて見るに、即ち太子と知りぬ。太子隠れ坐しまして、衣を易へて出でたまふ。日羅迎へて再拜すること兩段。大夫亦た驚きて、罪を謝して再拜し、儀を修めて入るに、太子辞讓して直ちに日羅が房に入りたまひぬ。日羅、地に跪いて、掌を合せて白して曰はく、「敬礼救世觀世音

大菩薩、伝灯東方粟散王云々」と。人聞くことを得ず。太子、容を修め、折磬して謝す。日羅大いに身より光を放つこと、火の熾なる炎の如し。太子亦た眉間より光を放ちたまふ。日の輝の枝の如し。須臾あつて即ち止みぬ(21)。

これによると、太子はみすばらしい服装をし、馬飼の子と並んで、身をやつしていたにも拘らず、神人、つまりここでは「救世觀音菩薩」であることを日羅から見抜かれている。このことは、光源氏が右大弁の子のように装わされ、やはり身をやつしていたにも拘らず、特別な人間であること見抜かれることにおいて共通している。身をやつすということは、ほかの資料には見られない独自の設定であるため、『聖徳太子伝曆』のこの条りは有力な準拠の一つに数え挙げられているのである(22)。

このように、光源氏の人物造型には聖徳太子がかなり深く関与していると見ることができよう。

『源氏物語』における高麗の相人の予言にとつてさらに重要なのは、光源氏が占われた観相の内容が聖徳太子にもまた当てはまるといふことなのである。

光源氏は、天子になるべき相を有しながら、いざ天子になれば、国が乱れ、民が憂えることになるだろう、と予言された。つまり、天皇になるべき相がありながら、国家や国民のために天皇になるべきではないと占われたのである。この予言を遵守するかのように、後年光源氏は天皇になるよう勧められながらも、とうとう天皇になることはなかった。光源氏は結局、天皇になることなく、「准太上天皇」という特殊な地位に身を置くこととなった。これは臣下でありながら皇族

に準ずるといふ立場で、相人の言つた「朝廷の柱石の臣となり国政を補佐するだけで終わる器量ではない」といふ予言をそのまま実現するかたちになつたのである。

高麗の相人の予言を、もし聖徳太子の生涯に照らし合わせてみたらどのようなであろうか。

光源氏は天皇になるべき相がありながら天皇になることはなかつたが、同じように聖徳太子もまた、天皇になるべき立場と充分な能力とを兼ね備えながら天皇になることはなかつた。つまり二人は、天皇の子として生まれ、人並み外れた能力を有し、人々から囑望されながらも、終に天皇にはならなかつたという点で、見事に共通しているのである。

また、光源氏は「准太上天皇」といふ特殊な地位に就くこととなつたが、聖徳太子もまた、推古天皇の摂政を務める「摂政皇太子」といふ特殊な立場に身を置くこととなつた。皇太子は通常次期皇位継承者を意味しているが、太子の場合には摂政としての面に比重が置かれ、天皇に代わつて国政を担当しつつも、天皇になることを前提としないといふ特殊な地位にあつたわけである。

このように考えると、聖徳太子は、高麗の相人が光源氏について占つた予言を実際に体現していた人物だつたと言ふことができるのである。

五 現世尊重の精神

これまでに私は、光源氏と聖徳太子をめぐるいくつかの共通点について述べてきた。これらはいずれもそれぞれに意味のある指摘だと思われる。しかし、実はこれだけではけつして充分とはいふ難いのである。ここには二人を結ぶ決定的な

要素が欠けている。その最も重要な共通点こそ、「異郷」に深く心を寄せながらも、俗世に身を置き、現実の政治に果敢に取り組んでいったといふ生き方そのものなのである。

光源氏はかなり早い時期から出家をころざし、最晩年に至るまで道心を抱きつづけた人物であつた。その源氏が、すでに述べた通り、異郷的価値を実現するために、身を捨てて、血なまぐさい政治の世界に手を染めていった。すなわち、光源氏は心を「異郷」に置きながらも、現世に留まり、この現実の地に「異郷」を実現しようと願つたのである。

このことはまた、聖徳太子についても同様に言うことができるのではなからうか。

聖徳太子は、摂政皇太子として政治に深く関与した希代の政治家であつた。しかし、その一方で年少の頃より仏教を厚く敬い、仏典の注釈書である『三経義疏』を著すなど仏教への造詣が殊の外深い人物でもあつた。すなわち、太子は摂政皇太子として実際の政治に尽力するかたわらで、仏教に帰依し、「浄土」といふ異郷の世界に深く心を寄せていたのである。

太子が仏教に帰依し、「異郷」を憧憬していたことは、例えば、次のような逸話にもよく表わされている。

推古元年（五九三）、即位したばかりの推古天皇は、摂政となつて自分を補佐するよう聖徳太子に依頼された。ところが太子は、はじめその要請をことごとく拒絶したといふのである。

即日。立太子。為皇太子。万機悉委焉。（中略）太子受儲君位。固辞再三曰。臣天性薄愚。志耽玄極。遊魂彼岸。消志道場。過去之世。身歷数十。遷

化漢土。僅為王族。練法通覺。期致淨土。而今
叨預儲君。委以萬機。神器難滿。宝祚易頽。伏惟。
陛下紹徽号。居紫極。駟八州。以仁壽之化。撫三
才。以柔和之猷。海表隨化。率土因蹤。嘉瑞頻來。
豐穰相係。伏願。陛下拱賢良。以輔治。用善哲。以撫
民。則万国歛心。四海平安。臣出家入道。為度外者。
興隆仏教。紹曜玄風。天皇不聽。勅曰。阿児勿
導。汝為耳目。姥非阿児。何由治国。太子不敢固
辭。天下之人民。聞而大悦。如遭慈父愛母。

即日太子を立てて、皇太子と為す。万機悉く委す。太
子、儲君の位を受けて、固く辞したまふこと再三にして、
曰はく、「臣、天性薄愚にして、志、玄極に耽る。魂を
彼岸に遊ばしめて、志を道場に銷す。過去の世に、身、
数十を歴て、漢土に遷化しき。僅かに王族と為りて、法
を鍊じ覺を通じて、浄土に到らんことを期し、しかるを
今、叨しく儲君に領して、委するに万機を以てせば、神
器満ち難く、宝祚頽れ易からん。伏して惟れば、陛下、
徽号を紹いで、紫極に居したまひ、八州を御するに仁壽
の化を以てし、三才を撫するに柔和の猷を以てせば、海
の表、化に随ひ、率土、蹤に因る。嘉瑞頻に來りて、豊
穰相ひ係るべし。伏して願はくは、陛下、賢良を拱んで
以て治を輔け、善哲を用ゐて以て民を撫じたまはば、則
ち万国、心を歛ばしめ、四海平安ならん。臣、出家入道
して、外者を度し、仏教を興隆し、玄風を紹耀せんと為
す。天皇、聴したまはずして、勅して曰はく、「阿児、
善ふこと勿れ。汝を耳目と為。姥、阿児に非ずんば、何
に由りてか国を治めん」と。太子敢へて固く辞したまは

ず。天下の人民、聞きて大いに悦ぶこと、慈父愛母に遭
へるが如し。

必要な部分だけを要約してみよう。

推古天皇からの要請を再三に亘って固辞した太子は、次の
ように言われた。「わたくしは、生まれつき愚かで、こころ
ざしは奥深い世界に耽っております。魂を悟りの境地に遊ば
せ、こころざしを仏道修行の場に埋没させております。仏法
に熟達し、悟りを啓いて、浄土に至ろうと決意しております
たのに、もし今、道理を無視して皇太子となり、政をすべて
任されたならば、陛下の地位も危ういことになりましょう。
わたくしは、出家入道して、仏教を盛んにし、深遠な教えを
ひときわ広めたいと存じております」と。

これを読むと、聖徳太子がいかに深く「異郷」に価値を置
いていた人物かが理解できる筈である。太子は、基本的にス
サノヲノミコトやかぐや姫、在原業平などといった「異郷」
をめざす人物の系列に数えることができるのだ。「魂を彼岸
に遊ばしめて、志を道場に銷す」、つまり魂を涅槃の境界に
浮揚させ、心を仏道修行のなかに深く沈潜させるといふこの
言葉は、太子が現実の世界を忘れ去って、仏教世界のなかに
没頭していることを意味しているよう。その上で、「法を鍊じ
覺を通じて、浄土に到らん」と、浄土に至ることを最高の理
想とし、「出家入道して、外者を度し、仏教を興隆し、玄風
を紹耀せん」、つまり、自分は出家して、仏教を盛んにして
仏法の深遠な教えを広めたいと言っているのである。

ここにおける太子の考え方によれば、太子の心は「異郷」
にのみあつて、現世にないことが解る。太子は現世を捨てて、
まさに「異郷」の世界に魂を奪われている。そうした太子に

とつて、皇太子となることや摂政となつて現実の政治に携わることには、迷惑でこそあれ、望むところではなかつた筈である。それゆゑ天皇の申し入れをことごとく拒絶した事情も首肯かれよう。

しかし太子は、重ねて要請する天皇の求めを最終的に受け容れざるを得なかつた。太子は皇太子となり、摂政となつて現実の政治を双肩に担うこととなつた。すなわち太子は、魂を「浄土」に置きながらも、現世の政に立ち向かうという立場に身を置くこととなつた。その結果太子の政治は、仏教を国家思想の基調に置き、その精神によつて国家を實踐的に救済するというものになつていつたのである。

「天寿国繡帳」の銘文には晩年の太子のことが記されている。

世間虚仮 唯仏是真

太子は、この言葉のことあるごとに呟いていたという。太子一生の結語であつたとも言われる。これを見るならば、太子の思想が晩年に至るまで生涯いささかも変わらないことが知られる。太子はこの世が「虚仮」なる世間、つまり仮りそのめの果敢無いものであることを深く理解しながらも、衆生を救うために敢えて「虚仮」なる現世に立ち向かうという壮絶な生涯を送られたのであつた。

そうした太子の政治理念の一端を、『釈日本紀』に引用された『伊予国風土記』逸文の「湯岡碑文」に窺うことができよう。

惟ふにそれ日月は上に照らして私せず。神井は下に出で

て給らざるなし。万機はゆゑに妙応し、百姓はゆゑに潜扇す。すなはち照らし給りて偏私なきは、何ぞ寿国に異ならん(23)。

これは、太子が摂政となつて四年目の推古四年、伊予の道後温泉を訪れた際に太子が建立した碑文の一部である。ここで注目したいのは、「何ぞ寿国に異ならん」という一句である。空に輝く太陽や月の光が万民を遍く照らすように、泉から湧き出る清らかな水が下へ下へと流れて万民を潤すように、私心というものが無いならば、この世もまたどうして「寿国」と異ならうか、というのである。ここで太子は、この世に「寿国」という理想の浄土を打ち立て、この世を「浄土」にしたいという為政者の理想を示しているのである。太子は、この現世に「浄土」を出現させることを理想とし、俗世に住む人々を積極的に救済することをみずからの使命とされたのではなかつたか。

太子が、難波の四天王寺を中心に、貧窮者のための「悲田院」、薬を作り施す「施薬院」、病者のための「療病院」のいわゆる三院を置いて、社会の救済事業に乗り出していったのも、そうした精神の表われだつたと考えられる。

太子は現実の営みの果敢なさを熟知していながら、現実から逃避して崇高な理想に殉ずるといふ道を選ばなかつた。「世間虚仮」、すなわち現実は空しく仮りそのめのものである。しかし、空しく仮りそのめのものであるからこそ、太子はこの世に留まつて民衆を救済し、崇高な理想をこの世に打ち立てようとしたのであつた。

光源氏は、一面で、こうした聖徳太子の尊い精神を受け継いだ人物だつたのではなからうか。源氏と太子は、「異郷」

に深く心を寄せながらも、俗世に身を置き、現実の直中に「異郷」を現出しようと努めた点で見事に共通しているのである。

これまで繰り返し述べてきたように、光源氏という人物は基本的にスサノヲノミコトをモデルとして造型された。その源泉としての地位は不動のものと考えられる。しかし、光源氏には、現実の政治をまったく放棄して異郷へと向かってしまったスサノヲノミコトには見られない現世尊重の精神が認められるのである。この精神こそほかならぬ聖徳太子から受け継いだものではなかったろうか。つまり光源氏という人物は、スサノヲノミコトを基本的なモデルとしながらも、最も重要な部分において聖徳太子の精神を模範とするといったように、スサノヲノミコトと聖徳太子という両者の生き方を同時に踏まえて造型された人物であったと言いうことができよう。それほどに聖徳太子は、『源氏物語』にとって欠くことのできない人物だったのである。すなわち聖徳太子は、光源氏の数あるモデルの一人というだけでなく、『源氏物語』を支える二本柱の一つとして、スサノヲノミコトに匹敵する重要な存在だったと結論することができるのである。

注

- (1) 杉浦一雄「源氏物語と絵合」(『千葉商大紀要』第四十四卷第一号、平成18年6月)
- 杉浦一雄「源氏物語と物語史」(『千葉商大紀要』第四十四卷第二号、平成18年9月)
- (2) 『源氏物語』の本文は、『新編日本古典文学全集』(小学館)に拠る。

- (3) 『紫明抄』の本文は、『源氏物語古註釈大成』第七卷(日本図書センター)に拠る。
- (4) 『河海抄』の本文は、『源氏物語古註釈大成』第六卷(日本図書センター)に拠る。
- (5) 『花鳥余情』巻八には、「河海には楚の屈原か江潭になかされし事はかりをしるされたりこのほか流刑をかうふりし人は代々たえすありし事也」(九五頁)とあり、『細流抄』巻三には、「河海屈原をひけり一人にかきるへからざる也」(一一八頁)とある。なお、『花鳥余情』『細流抄』の本文は、いずれも「源氏物語古註釈集成」(桜楓社)に拠る。
- (6) 星川清孝氏「楚辞」(『新釈漢文大系』、明治書院、昭和45年、二七八―二八一頁)
- (7) 『岷江入楚』第二卷、須磨十二(『源氏物語古註釈集成』第十二卷、桜楓社、九三頁)
- (8) 『増註源氏物語湖月抄』上巻(名著普及会、昭和54年)
- (9) 与謝野晶子氏訳『源氏物語』上巻(角川文庫)
- (10) 谷崎潤一郎氏訳『源氏物語』巻三(中央公論社、昭和26年)
- (11) 円地文子氏訳『源氏物語』巻三(新潮社、昭和47年)
- (12) 山岸徳平氏『源氏物語』二(『日本古典文学大系』、昭和34年、四九頁、頭注)
- (13) 玉上琢弥氏『源氏物語評釈』第三卷(昭和40年、一三三頁、鑑賞)
- (14) 『源氏物語』二(『日本古典文学全集』、昭和47年、二〇六頁、頭注)
- (15) 今泉忠義氏訳『源氏物語 現代語訳』三(桜楓社、昭和49年)
- (16) 河添房江氏「北山の光源氏」(『源氏物語表現史―喩と王

- 権の位相」、翰林書房、平成10年)
- (17) 『日本書紀』の本文は、「新編日本古典文学全集」(小学館)に拠る。
- (18) 田中重久氏「聖徳太子伝暦と源氏物語」(『聖徳太子絵伝と尊像の研究』、昭和18年)
- (19) 杉浦一雄「源氏物語の源泉」(『千葉商大紀要』第三十七卷第四号、平成12年3月)
- (20) 『聖徳太子伝暦』上巻(『大日本仏教全書』第七十一卷、史伝部十、講談社、一二七頁)
- (21) 日中文化交流史研究会編『聖徳太子伝暦』影印と研究(昭和60年、四九頁)
- (22) 松本三枝子氏「光源氏と聖徳太子」(『へいあんぶんがく』第一号、昭和42年7月)
- 堀内秀晃氏「光源氏と聖徳太子信仰」(講座 源氏物語の世界)第二集、有斐閣、昭和55年)
- (23) 坂本太郎氏『坂本太郎著作集』第九卷(吉川弘文館、三三頁)

〔抄録〕

光源氏は、スサノヲノミコトをはじめとする「異郷をめざす物語」の主人公として描かれながら、俗世に身を置き、現実の世界に重きを置いていく点で、かぐや姫、在原業平、そしてスサノヲノミコトの生き方とは明らかに様相を異にしている。このような光源氏の人物像は、一体何を模範として造型されたのであろうか。

私はその最も強固な源泉の一つに聖徳太子があると考ええる。光源氏と聖徳太子とのかかわりは指摘されて久しいが、実は二人を結ぶ決定的な共通点こそ、「異郷」に深く心を寄せながらも、俗世に身を置き、現実の世界に「異郷」を現出しようと努めた点にあると私は考えたい。すなわち光源氏は、一面で、スサノヲノミコトには見られない現世尊重の精神を聖徳太子から受け継いだ人物であったと言いうことができよう。その意味で聖徳太子は、光源氏の数あるモデルの一人というだけでなく、『源氏物語』を支える二本柱の一つとして、スサノヲノミコトに匹敵する重要な存在だったと結論することができるのである。